

## 英語学のための句構造説最終決着版

— ラネカ — 説を論駁する raising の本質論 —

田 原 薫

### 0. はじめに

「英語学のための句構造説最終決着版」という表題は一見いささか傲慢な命名であるが、「最終決着版」というのは、これが最善だから反論をやめよ、という主張の意味ではない。チョムスキーが口火を切ってもう半世紀になんなんとする、結局は不毛ないし貧瘦な成果に終わった変形生成文法の句構造理論の信奉者たちに対し、いさぎよくその失敗を認めて従来の論法に結末をつけ、理論の再建に再出発するように勧告し、その際に考慮に入れるべき必要な観点を教えてさし上げよう、というのが本小論の趣旨である。

もう一つ、「英語学のための」と銘打ったのは、英語しか視野に入れないでいてあまり「普遍」とかUG(Universal Grammar)とか言ってほしくない、という私の主張を言葉にしたものである。これは Foley & Van Valin[1984]および Van Valin[1993]の見解であるが、英語には或る点で世界の言語のモデルと見なすには不適当な特徴がある。それは、世界の多くの言語に広範に見られる使役構文の型をもっていない、という点である。たとえばフランス語では「私はポールに菓子を食べさせる」を‘Je fais manger les gâteaux à Paul.’と言うが、これが問題の使役構文であって、serial verb construction(動詞連鎖構造)をもち、被使役者である Paul が(対格でなく)斜格で出現する。対応する日本語の文も「ポールに」であり、「食べさせる」のように動詞連鎖構造を使っている。実はこのような使役構文がむしろ‘universal’の名にふさわしく広域普及的な型であり、英語はこの型を欠き、‘I make Paul eat the cakes.’の型しかないから、言語学研究用の世界言語のモデルとしてふさわしくない。Van Valin らの主張するRRG(Role and Reference Grammar)では日仏-universal型の使役構文は核結合(nuclear juncture)により、また英語型の使役構文は芯結合(core juncture)によって産出されたものなので、後者を規範として前者を割り切ることはできない、とされる。だから英語の生成文法の句構造で、埋め込み(embedding)や編入(incorporation)の手段に訴えても世界の使役構文はうまく説明できないが、私見では使役構文は3次元的な「位相論的統語観」を使って説明すべきものである。しかし英語に関する限り核結合の現象がないから、概ね2分岐型の句構造をうまく使えば大抵の統語現象が説明できるけれど、それは幸運な偶然と考えるべきである。

1. 成分の参加型の影響行使 — c-command型の不毛を超えて

《チョムスキーという人はほんとに頭が悪い》と私が思う理由は、彼が Chomsky[1995] の第4章、いわゆる ‘Categories and Transformations’ 理論において、語彙項目の集合から bottom-up式に文を組み立てていく構築文法の立場を宣言したにも拘らず、なおかつ基底の文構築の手順において主語候補を目的語（候補）よりも上位の階層、つまりより遅く集合に加わる成分として位置づけていることである。この点は、top-down型の分析文法であった彼の変形文法の最初のバージョンから一貫して変わっていない。しかし常識的に考えれば、top-down型の分析文法で確立した、「最も早く枝分かれする」という主語を巡る構造がそのまま bottom-up式の構築文法に通用するとは考え難い。当然別の構造を指定しなければならないが、彼が[Subj[V Obj]]の構造にこだわったのは、この構造によって Obj の  $\theta$  役割が（受動者と）決まる、と勝手に思い込んでいたからであろう。しかし論理的にはそんなことはあり得ない。階層付き句構造はあくまで成分の結合順序を示すものにすぎず、項がもつ  $\theta$  役割とは本来何ら関係がない筈である。また、Binding（指示束縛）の面で、[Subj[V Obj]]のSubjがObjを束縛するのは、前者が後者をc-commandしていることの効果として当然だと説明できる、と言うが、c-commandは分析文法でこそ有効に働く概念であり、構築文法ではむしろ「より早い集合参加による影響行使」の概念の方が重要になってくる。両者の違いを図によって把握しておこう。

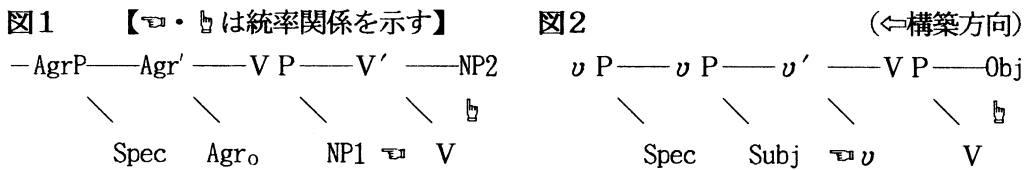


図3

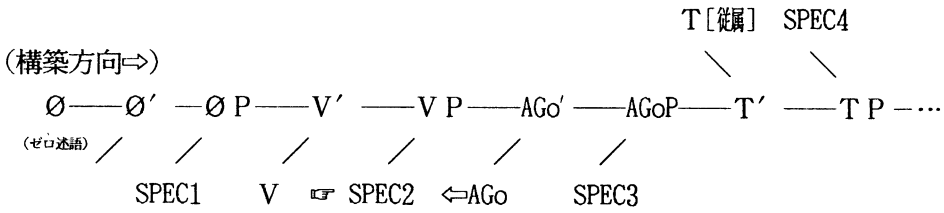


図1と図2はチョムスキーの図式で、図1は Chomsky[1995]の第3章 ‘A Minimalist Program for Linguistic Theory’の句構造；図2は同著第4章の‘Categories and Transformations’の句構造である。前者（図1）は基本的性格が分析文法なのか構築文法なのか明確でないが、NP1が主語候補、NP2が目的語候補であり、両NPが他動詞Vに統率される構造から出発している。後者（図2）については、構築文法であることが宣言されており、Vは1項動詞（自動詞？）であり、 $\nu$ は使役の意味の軽動詞で、これがVを編入して他動詞が形成されるという。従ってVの唯一項 Objの方が $\nu$ の項Subjよりも早く発生することになるが、それでSubjがObjを束縛することができるのか、心配になってくる。とも

あれ、SubjがObj を c 統御する構造から、NP2(Obj)は対格照合のために図1・図2のSpec に移動し、そこでその移動は止まる。NP1(Subj) はその位置を跨いでさらに上部の指定辞の位置に移動し、主格を照合される、というのがチョムスキー理論の骨子である。

一方、図3は筆者の所謂SOOT h 2図式で、田原[1999a]に出したもの。便宜上TPの構築までを示した。Øはゼロ述語で、ここに叙述の性格（事件記述か属性記述かというような…）が乗り込む座席でもある。そうなったゼロ述語は、後ほどその叙述の中心的役割を果たす述語に編入される。基底においてこのゼロ述語の指定辞の位置に生ずるSPEC1が無標的な主語候補となる。こんな構造のゼロ述語句のPから出発する文法は当然構築型の文法であり、図で左端から右へと構築が進むが、注目すべきは、内容未詳定ながらもかく述語と、その叙述性格と、主語候補とがØPのレベルで出揃うことである。あとは出現する述語と項（すべて指定辞）によってそれを詳定していけばよい。Vが他動詞ならばその指定辞SPEC2 は目的語候補である。AGo はそれが受動者であることを確認する（通常無音の）心理的述語である。【難易文ではAGo の地位に難易形容詞が入る】

図3で主語候補SPEC1 は目的語候補SPEC2 を当然c-command していない。しかしSPEC2の結合相手たるV'へは構成要素としてSPEC1 が参加しているのであるから、SPEC1 は節点VPを通じて何らかの影響をSPEC2 に与えることができる筈であり、Binding のBinderとして働ける筈である。かつてc-commandの逆関係として‘be in construction with …’「…と構造をなす」ということが言われた時期があり、それを使えば“SPEC1 is in construction with SPEC2.”と言えるわけである。「…と構造をなす」は介在する節点の数が「…をc統御する」と同じであるから、何もc統御だけを優遇すべき理由はない。分析文法でなら最初に（最上位で）他の語句と別れる成分を優遇する理由もあろうが、構築文法ではc-commander は最も遅く集合に参加する成分であるから、むしろ古参のSPEC1の方が新参のSPEC2よりも「顔が利き」、古参要素から新参要素へ与える影響もある筈である。私はむしろc-commandの逆関係をv(eteran)-command「古参統御」と呼びたい。文法の性格として構築文法を採るなら、v-commandの方が遙かに重要な概念である。

ここで、図3のような構造でVは、SPEC2を「配率(はいせつ)する(high-sort)」と呼ぶことにする。またVはØPとSPEC1を「引率する(in-sort)」と言い、両者が私流の統率の概念である。すると、図3でSPEC2はVに配率され・AGoに引率されていることになる。このことを「SPEC2はVとAGoに挟み統率されている」と言うことにする。SPEC2はVからその項であることを保証され、AGoからそれが受動者であることをチェックされるから、この位置で対格の資格を保証されるのである。一方SPEC1はVに引率されるが、配率者たるØは格付与に関係しない述語なので、そのままの位置では主格の資格を保証されない。その資格を獲得するにはもっと上部（図の右側）に転入しなければならないのである。

私は以下で図3のような構築型の句構造を使って英語の繰り上げ構文などを分析するが、そこには認識が乗り込む無音の述語ØやAGo, AGsといった成分が導入されている。

## 2. 認識文法の統語部門と必要な諸概念

私は文法というものをチョムスキーのように、適格文を過不足なく生成するソフトウェアにすぎない、とは勿論考えないが、さりとてラネカー(Ronald W. Langacker)のように、言語は話者の認知構造を直接具現化するもの、とも思わない。そうではなく、《言語は、それ自身を通じて聞き手の心中に二次的・擬似体験的な認知構造を作らせるように誘導する営みである。》と考える。勿論、話し手の認知構造が先行しなければならないが、それは純粹に合理的な手順のみによっては聞き手に伝わらない。まず話し手の幾多の認知体験は記憶・集積され、過去の集積物との間に異同の比較がなされ、類型別にまとめられ、パターン化された概念となって再び記憶される。それをcognitionでなくrecognition「認識」と呼ぶことに異論はあるまいが、communicationが成立するためには、単に聞き手が話し手と同じ「認識」の体系とレパートリーをもっているだけでは不充分である。

communicationは話し手が電波を發して直接聞き手の脳内のreceiver/receptorを動かすtelepathyによるのではなく、不完全なシステムである言語という記号に「認識」が訳されて聞き手の聴覚に届けられ、それによって聞き手は脳内の「認識」を然るべく活性化し、認知を擬似体験するのである。ところが、言語という記号には理性で説明のつかない不条理／理不尽な側面がある。英語以外の多くの欧州語が文法性類(gender)をもっていて、冠詞や形容詞がそれに一致しなければならない、というのはその一例であるが、たとえばドイツ語でderと聞こえても、それがかかる名詞が「男性」であるか「女性」であるかを知らなければ、名詞が主格であるか属格／与格であるかを判断できないのである。そういう一致などの統語上の手段は、話し手が勝手に理性的に設定し直すことができず、当該言語の(時には理不尽な)統語法のレパートリーが供給する手順を遵守して初めて、聞き手に擬似体験を起こさせることができる。だから、認知の機構と構造さえ説明すればよしとする、ラネカーの認知文法は多くの循環論法を含んだ価値の低いものであって、必要なのは認識と統語法との関係を記述し・説明する「認識文法」=recognitive grammarなのである。そこには当然、統語論が組み込まれている。だから統語現象の中の理不尽な側面、たとえばgenderの記憶や一致の強制なども高次の認識に組み込まれているのである。

以上のように認識部門と統語部門との関係を(車の両輪のように)踏まえた上で、英語の繰り上げ構文や難易文を解析するために必要な統語上の概念の整備を試みよう。まず構築型句構造で図4のような構造がある場合、Subject, Sub-Ject, Superjectを定義する。うちSubject「株語」は従来Complement「補語」と言われているものである。

図4 (構築方向⇔)

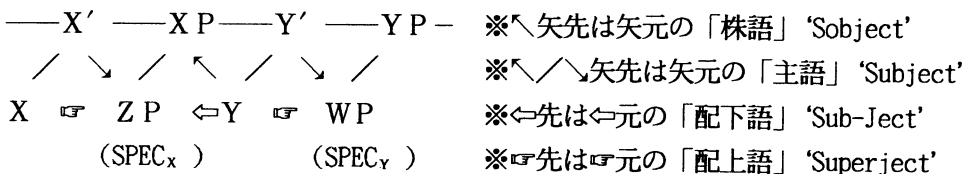


図4で、XとYはゼロレベルの範疇で、それぞれの投射を作る述語であるとする。この句構造でXPをYの「株語(かぶ/しりこ)」‘Subject’と呼ぶが、本システムでは「株語」もまた‘Subject’の下位類と見なす。主辞から見た補語(株語)、および中間投射から見た指定辞はともに広義の「主語」になり、図では斜め矢 $\swarrow$ / $\searrow$ の矢先で示される。

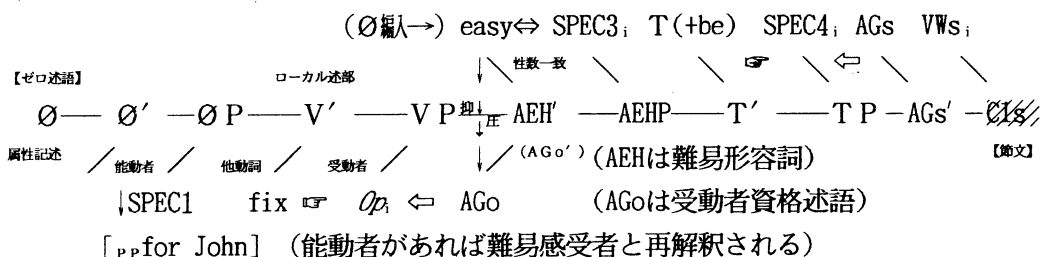
隣接した枝どうしの関係については、図のような場合ZPはYの「配下語」‘Sub-Ject’であると言う。その関係を $\Leftarrow$ 印で示す。ついで、図のような場合にXはZPを・YはWPを、単に指定辞と呼んでもすむが、概念/用語の均衡上、ZPはXの(そしてWPはYの)「配上語’Superject’である、と言う。 $\Leftarrow$ 印で示されている。この‘Superject’という名称は、とりわけ下から移動してここに放り上げられた語句によく似合っている。実際、述語の「配下語」が同じ述語の「配上語」に昇進する現象は難易文などで頻発している。

### 3. 具体的な難易文の分析

以上の概念を使って次の難易文を分析する(…というか、むしろ構築する)。

(1) Volkswagens are easy (for John) to fix. 「フォルクスワーゲンは修理しやすい」

図5 【※ Volkswagen は VW と短縮表記】



図は左から右へと構築が進むように書いてある。図を右上のVWsから読み始めてCの字を書くように読み出せば、表層構造に対応するが、この構造の解釈は次のようである。

まず $\emptyset$ に乗り込む素性は[難謎]であり、[難謎]でない。難易形容詞 easy はAGoと同じ階層に入り、AGoの対格認可能力を抑え込む。 $\emptyset_1$ の位置にはfixのSuperjectとしてVWsが元来入っていたが、この項はSPEC3, SPEC4を経て最終的にSPEC5たる現位置に就く。

注目すべきは、easyから見たSubject=VPと、Sub-Ject= $\emptyset_1$ 、Superject=SPEC3の相互関係である。SPEC3はもとSub-Ject=VWsが移転して入った地位である。そして「株語」VPは「VWを修理すること」を表わし、これが常に同じEASYの叙述対象なのである。決してVWsがEASYの直接の叙述対象なのではない。Sub-Jectというのは統語論上の主語への候補にすぎない。以上のように難易文はSubjectとSub-Jectの齟齬から起動されるものである。こう考えると、英語の難易文は日本語の二重主語構文・さらにはウナギ文と似たところがある。cf. 「象さん、象さん、お鼻が長いね。そうよ、かあさんも長いのよ」この日本の童謡においてもかあさんが直接長いの被叙述項になるとは認識されない。

図5について説明を付け加える。難易形容詞 easy はAGO と同じレベル、すなわちもと Vws の始発位置であるSPEC2(*Op*)の一つ上の枝に現れる。しかし語順の点でVPより早く読み出されるように、構築方向に対して左側(図5では上側)に置かれる。AGOも消滅はしないが、難易文の局面では対象(SPEC2)の受動者性よりも、その対象が動作主(SPEC1)に対して投げ返す抵抗感の方が重視されるので、主役の easy に抑圧されてAGOは対格認可能力を失う。従って目的語候補SPEC2は始発位置では格をもつことができない。

一方、動作主【図で小さく「能動者」「受動者」と記してあるのは Van ValinらのRRGの概念であり、認知でなく認識のレベルに属するが、詳細は省略する】たるSPEC1の運命/処遇はどうかというと、素性[融謎]の乗り込んだゼロ述語が属性記述の中心語彙たる easy に編入されてしまうので、その指定辞SPEC1は宙に浮くことになり、情報価値が低ければ省略されるか、必要なら難易感受者と再解釈されて for John の形の句となる。

さて、easy のSub-JectたるSPEC2(Vws)は空席になっているSuperject=SPEC3の位置に転入することができるが、転出に際して跡に無音の*Op*(erator)を残す。この段階で述語とその配上語SPEC3との間に性数一致、あるいは性数一致の予約という不合理的加工が施されるのである。これはあくまで高次の認識のレベルで起こるのであって、合理的な認知とは関係がない。尤も、英語では easy は不変化詞だからスペイン語を見てみよう。

(2) Este libro es fácil de leer. 「この本は読み易い」

(3) Estos libros son fáciles de leer. 「これらの本は読み易い」

これらの文は節文構築の最終出力であるが、主語の単複に応じて形容詞 fácil(es)も一致をしている。しかし認知レベルでは形容詞の叙述対象はあくまで読むこと(de leer *Op*)であり、決してラネカーのように難易形容詞の多義分化が起こったとは考えるべきでない。主語との一致は実は難易形容詞に編入したのに起こる現象と捉えるべきであろう。

さて、SPEC2に発祥したVwsはeasyのSuperject=SPEC3の位置に転出【extroversion「外転」と呼ぶ】したが、性数一致を予約されてもまだ主格は獲得できない。SPEC3の位置はコピュラ付き時制子T(+be)のSub-Jectなので、この時制子によってさらに extrovert されてSuperject=SPEC4の地位に就く。この位置でSPEC4はTとAGs(主格資格照合子)によって挟み統率されるので、主格を認可される。さらに何らかの主題化作用によって外転され、真の節文(clause=Cls)主語の地位に就任するのである。

#### 4. 'SSR' と 'SOR' における従属節と情報分割

'SSR' というのは初期の変形文法でよく論じられた「主語から主語への繰り上げ」、'SOR' というのは同じく「主語から目的語への繰り上げ」ということであり、それぞれ次のような例文の生成に関与していると考えられた。Langacker[1995] 参照。

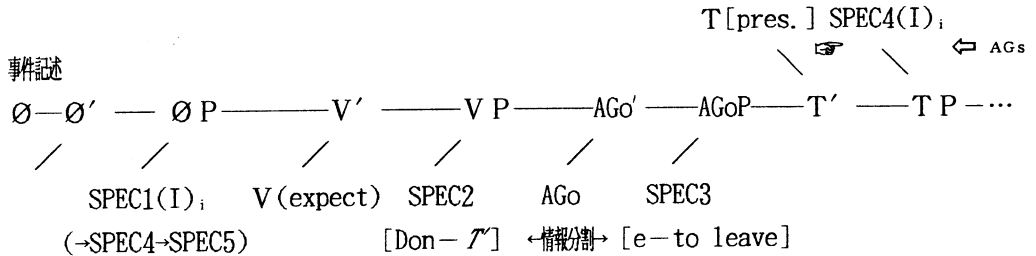
(4) Don is likely to leave. (cf. That Don will leave is likely.) 【SSRの例】

(5) I expect Don to leave. (cf. I expect that Don will leave. ) 【SORの例】

( )内に参考として挙げた文は、それぞれ該当する変形が掛からなかった「もとの文」と考えられたもので、最近の変形文法では廃れているが、こんな思想が往時は流行した。さて、「もとの文」でthat付き補文を形成していた主語と述部とが、(4)(5)では Don…to leave のように分裂しているのであるから、その分裂を背後から支える認識の機構をまず解明すべきであるが、それは長く複雑になるので、情報分裂を取り扱う技術的側面を先に解決しておくことにする。

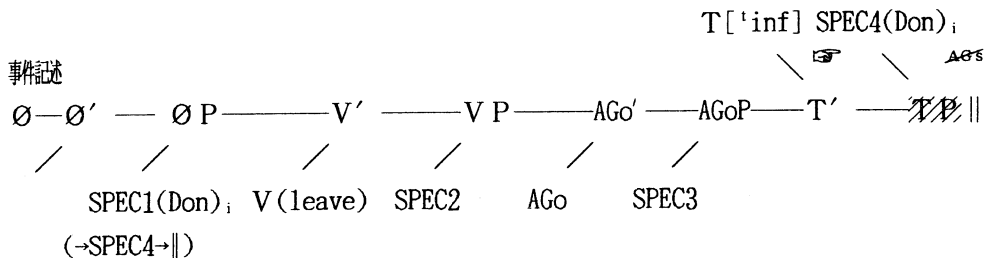
例文(4)(5)のような繰り上げが掛かった構文においては、埋め込まれるべき従属節がその主語SPEC4 と述部T' とのペアである段階で、一方では主語だけを明示した[Don-T'] という版と、他方では述部だけを明示した[e-to leave] という版へと「情報分割」されて、それぞれ主節の位置SPEC2, SPEC3に収容される、と考えれば容易に説明できる。都合上、'SOR' の(5) から考察する。【従属節の構造は後ほど考察する。☞図7】

図6



《私が…期待する》というのも一応事件であるから、Øに乗り込む素性は[軀説]である。期待する内容は固定した物件(entity)ではなく「情報」であるから、本来述語AGo と同じ階層に【難易形容詞 easy がそうであったように】収容されるべきであるが、情報分割が起こって、主語Don を顕示した方の情報分枝(split information)はSPEC2 へ、述部を顕示した方の情報分枝はSPEC3 へと分けて収容される。Sub-Jectと Superjectはこのようにも使えるのである。図ではTPの構築までを示したが、この上に主格照合子AGs が掛かるので、SPEC4 (やがて→SPEC5)に進出した I は主格を認可される。さて、情報分割されて埋め込まれるべき従属節(彗彗)の構造は、次に示すものである。

図7



【図で「||」は構築の過程がそこで停止することを表わす。['inf]はto付き不定詞形】

おわかりのように**多形**の上にAGs が掛からない。だから主格はここには現れない。従ってSPEC1(Don); がSPEC4(Don); へと昇進しても、内部で格付与することができず、外部から浸透する格認可の力を待って対格を認可されるしか、音形を得る手段がない。この**多形**の一つのバージョン[Don-*r*] は主節のSPEC2 に収容され、V(expect)とAGO に挟み統率される【図6参照】ことになるので、対格を認可されるが、その対格が内部の最上位の指定辞に浸透して Don は対格を得る。代名詞なら him となる。しかし、これが認知レベルでの真の目的語でないことは当然である。

### 5. 情報分割を支える認知機構

たとえば《ドンが去る》という事態の認知にあたって、認知者(conceptualizer)の態度は少なくとも次の三つのモードであり得る。すなわち①何か報道に値することはないか、と探索していて、《ドンが去る》という事態に出くわして、それを平板な新情報として認知する場合、②去る人物は誰か、と注意を集中していて、そこで新情報として《去る人物はドンだ》と認知する場合、③ドンの行動に注意していて、そこで新情報として《ドンは去る》と認知する場合…。しかし、認知者がただ認知するだけで、その結果を黙って心にしまっておくだけ【ラネカー流認知文法には絶えずこのモードが付き纏う！】なら、これらを言い分ける必要はない。従って、非繰り上げ構文(①の場合)さえあればよい。繰り上げ構文は②・③のように情報段差(情報勾配)がある場合に対応するために存在する。つまり、或る情報をその論理的因数に因数分解し、その各々の因数の情動的(新旧)身分を聞き手に伝えようとするところに「繰り上げ構文」の存在意義がある。

図8

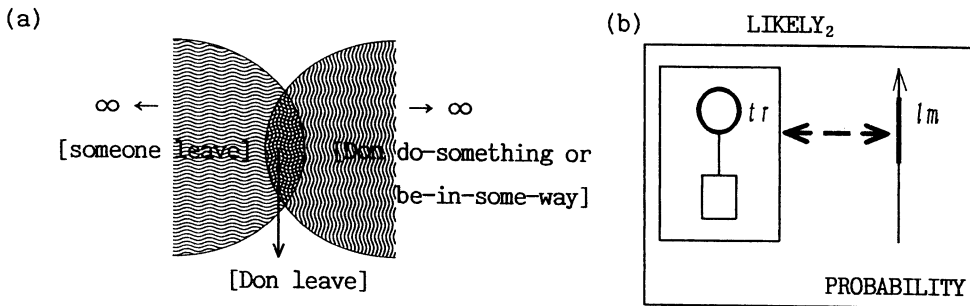


図8(a)は、[Don leave] という命題が、[Don do-something or be-in-some-way]という(無限集合)命題と・[someone leave] という(無限集合)命題の論理積であることを示す。論理積たる[Don leave] を一つの固定された情報として扱えば非繰り上げ構文となり、成分命題の各々の情報身分(新/旧)を問うならば、繰り上げ構文がそれに当たる。

図8(b)は Langacker[1995]に‘FIGURE 7’の一部として挙げられたものであり、これが繰り上げ構文(4)を作る LIKELY<sub>2</sub> の認知構造だと主張されている。今の場合、太枠の○



(tr=trajector)がDon にあたり、その下に繋がっている□が to leave にあたる。しかし entity (discrete object)たる○と・process たる□とを単に図のように繋いで書いたのでは、両者が論理積を作る関係にあることが読み取れない。また、to leave にあたる□も別に必ず叙述(profile)しなければならぬから、これが太く描かれていないのは誤りである。さらに、○と□とのどちらが焦点化されて（‘1m’たる）high probabilityの叙述を受けるのか、という点も、明示する手段がこのラネカー・システムにはない。

(6) Don is likely to leave. 【leave 強調のprosody】「ドンは去るらしい。」

(7) Don is likely to leave. 【Don 強調のprosody】「去るのはドンらしい。」

図8(a)のように考えれば、論理積を作っている成分命題のうちどちらが likely[high probability]の直接の叙述対象になっているか、を認識することができる。(7)で、Don 即entityとラネカーのように考えてはならない。[Don do-something or be-in-some-way]という命題または‘Who does-something or is-in-some-way is Don.’という命題が表わす‘process’と見なすべきである。【新情報は何であれすべて‘process’である。】

## 6. 認識機構を支える情報分割と人間の実存性（さが）

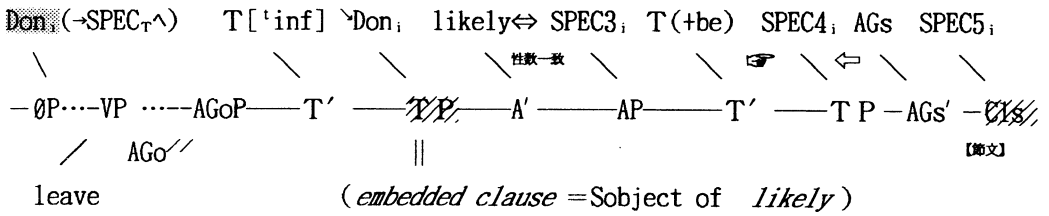
情報分割というのは、聞き手・或いは聞き手の情報処理を支援する話し手にとって、被叙述項と叙述部との間の、新/旧情報としての勾配または段差の存在を明瞭にするために確保する手段のことを言うのであるが、話し言葉の場合はストレスやイントネーションがその役に立つ。しかし、話し言葉と書き言葉を通じて使われる手段は、広義の「主語」にあたる被叙述項とそれに対応する叙述部とを、何らかの手段で適当に離間させておくことである【適当に、というのが微妙で、離れすぎてもだめであるが】。このことは必ずしも時間的な隣接（継起）関係を避けるということの意味しない。むしろ、広義の「主語」を最高位の指定辞（SPEC<sub>pd</sub>）に置き、従って対応する述部をその残部（Pd’）とする句構造で、そのペアの上にそれらを共通にc統御する何の成分も掛からない場合、つまり指定辞（SPEC<sub>pd</sub>）と残部（Pd’）とを結束させる要素がなく、それらが最外部に露出して並置されている場合は、すでにそれらは適当に離間している（例の一つ）と言ってよい。これは「情報分割」と言うよりむしろ消極的な「情報未結束」と呼ぶ方が適切かもしれない。

情報分割のもう一つのタイプは、（消極的に被叙述項と叙述部とを結束させないでおくのではなく）full proposition (information)を、被叙述項だけを顕示した版と・叙述部だけを顕示した版とに積極的に分けるやり方であり、すでに図6による例文(5)の分析の際に登場した。どちらのタイプにせよ、もし話し手が「主語」のみを聞き手に流し、その直後に「述部」が後続しなければ、聞き手は、「主語」がどうなのか、どうなったか、などと興味・関心をもち、話し手が何かの続報でその興味・関心を満たしてくれることを期待する。それがいわば人間の実存的な性（さが）と言えよう。話し手は聞き手側のそんな性（さが）を利用して、聞き手の心中に興味の中心‘the communicational trajector’とい

うべきものを作らせ、二次的な認識プロセスを起動させ、リードしている。故に主語とは認知のレベルでなく、認識の誘発行為において中心的な地位を与えられる要素である。それを認知の現象と考え、不毛な循環論に陥ったラネカーはやはり頭が悪いのである。

最後に、(4) Don is likely to leave. の統語構造を考えてみよう。

図9 【なお [TP Don -to leave] の内部構造の詳細は図7を参照されたい。】



まず、中央のA'から左が従属節。その内部でDon が主語(SPEC4) になるが、AGs 不在のため格は未付与。この項が主節のSPEC3 に外転して、最終的にSPEC5 まで昇進した。

参考文献

Chomsky, Noam [1995] *The Minimalist Program*. The MIT Press.

Langacker, Ronald W. [1995] 'Raising and Transparency'. *Language* Vol. 71, No. 1, pp. 1-62.

Van Valin, Robert D. (ed.) [1993] *Advances in Role and Reference Grammar*. John Benjamins Publ. Co.

田原 薫 [1997 a] 「ゼロ述語から出発する句構造文法－補語名詞句否定説：名詞句すべて指定辞説－」『ニダバ』第26号、pp. 1-10、西日本言語学会。

田原 薫 [1997 b] 「新句構造文法SOOT h 2の基本概念－意味と形式の接点を目指して」『言語文化学会論集』第8号、pp. 59-71、言語文化学会。

田原 薫 [1997 c] 「新句構造文法SOOT h 2の基本概念－意味と形式の接点を目指して(続篇)」『言語文化学会論集』第9号、pp. 65-76、言語文化学会。

田原 薫 [1998 a] 「主語初頭生起説から見た英語の完了構文－過去分詞の復権とhaveの意味論」『ニダバ』第27号、pp. 57-66、西日本言語学会。

田原 薫 [1998 b] 「新句構造文法SOOT h 2の基本概念－意味と形式の接点を目指して(完結篇)」『言語文化学会論集』第10号、pp. 63-77、言語文化学会。

田原 薫 [1999 a] 「Langacker(1995) 繰り上げ論批判I－曖昧なメトニミー概念の濫用の危険さ－」『言語文化学会論集』第12号、pp. 191-210、言語文化学会。

田原 薫 [1999 b] 「Langacker(1995) 繰り上げ論批判II－目的語の共有と目的語が転出する構文－」『言語文化学会論集』第13号、pp. 55-74、言語文化学会。

田原 薫 [2003] 「新句構造文法SOOT h 理解の指針」『ニダバ』第32号、pp. 165-167